

## 中川町におけるクビナガリュウ化石 (NMV-2) の発掘

西野孝信\*・鎌塚一成\*\*・小池 豊\*\*

\*中川町郷土資料館, \*\*なかがわ化石会

中川町産平成三年発掘クビナガリュウ (NMV-2; 中川町郷土資料館登録番号) は、8月8日埼玉県在住の山路徳次ほか3名により、炭の沢上流の小沢で発見された (図1)。発見場所は、作業のため機械により削り取られた露頭で、白亜紀後期の砂岩を主体とする安川層が露出する (写真1)。発見者と同行して露頭を観察した結果、風化した青灰色細粒砂岩の表面に腹肋骨2本および椎骨の一部が確認された。数回の事前調査の後、8月22日から24日まで中川町で発掘を行うことが決定した (実際には1日延長し、25日まで発掘が行われた)。発掘初日の22日は化石骨の発見された露頭周辺の転石の調査を行い化石骨の有無を確認し、同時に重機により周辺の土砂を取り除く作業を行った。発掘作業が進むにつれ、化石骨の産状が明らかになってきた。化石骨は母岩の青灰色砂岩中にも含まれるが、その大部分はレンズ状の長径およそ3mの石灰質コンクリーション中に含まれ (写真2)、さらにその下位のコンクリーション中にも含まれることが確認された。化石骨の保存はよく、上位の石灰質コンクリーション中には肋骨、胴椎、胸椎、頸椎、鳥口骨の一部、頭骨の一部および胃石が含まれており (写真3, 4)、下位のコンクリーションからは比較的よく関節した頸椎、肩甲骨、肋骨、四肢骨などが発見された (写真5; 詳細は本紀要中の仲谷・小川, 1998を参照)。また、化石骨周辺から *Metaplacenticeras subtilistriatum*, *Pachydiscus soyaensis* などのアンモナイト化石が多数採集され (写真6)、産出層準は上部カンパニアンであることが明らかになった。そのほかツノガイの仲間、ウニの仲間、カグラザメの仲間の歯などが同時に採集された。手作業の発掘が続いたが、25日には発掘した化石骨を含むすべての試料が中川町郷土資料館へ搬出された。搬出後も、産出地点付近の地層の剥離作業を続けるが、化石骨は発見できず作業は終了した。

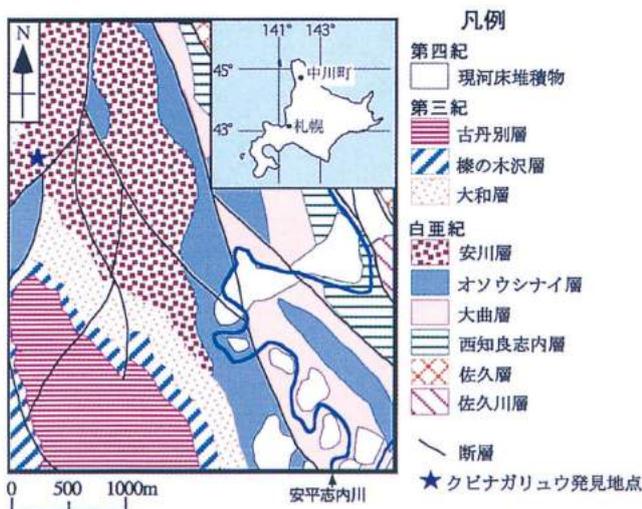


図1: クビナガリュウ化石 (NMV-2) の産出地点の地質図 (橋本ほか, 1967)。



写真1 クビナガリュウ化石が産出した露頭。マトリックスは青灰色細粒砂岩からなり、地層は露頭左側へ傾斜している。

### あとがき

平成三年のクビナガリュウの発掘は、4日間にわたって次頁の参加者で行われた (写真7)。魚住悟北海道大学名誉教授 (中川町郷土資料館名誉館長) および北海道開拓記念館の赤松守雄博士には発掘のご指導をい

ただいた。また発掘にあたって、名寄営林署佐久合同担当区事務所の方々にはいろいろとお世話になった。北部興業の石黒真敏、佐藤英雄の両氏には重機での作業をご協力いただいた。なかがわ化石会の長坂有氏には産状のスケッチを担当していただいた。また、そのほかの中川町役場の職員およびなかがわ化石会の方々のご協力のおかげで本論をまとめることができた。以上の方々に厚く御礼申し上げる次第である。

### 参加者

魚住 悟（北大名誉教授・中川町郷土資料館名誉館長）

赤松守雄（北海道開拓記念館）

亀島伸一・浅田 健（中川町役場）

西野孝信・鎌塚一成・小池 豊（ふるさと創生事業協力員；当時）

川本専吉・原 正久・遠藤富士幸・長坂 有・川口精雄・清水 一（なかがわ化石会）

石黒真敏・佐藤英雄（北部興業）



写真2：化石骨の含まれていた石灰質コンクリーション



写真3：化石骨の産状。それぞれの骨は関接しておらず、本来の位置関係は残っていない。



写真4：鳥口骨（肩の骨）の産状の拡大。



写真5：石灰質コンクリーションより取り出された指骨。



写真6：クビナガリュウ化石とともに産出したアンモナイト化石。スケールは30cm.



写真7：クビナガリュウ化石の発掘に携わったメンバー。